

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32635
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：19K00062
研究課題名（和文）インド仏教最後期における学知形成と展開—文証としての引用と知識基盤の関係性—
研究課題名（英文）Formation and Development of the Knowledge base in the Last Period of Indian Buddhism
研究代表者
倉西 憲一（Kuranishi, Kenichi）
大正大学・仏教学部・専任講師
研究者番号：90573709
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：当該科研プロジェクトの目的は、インド仏教衰退が加速した12世紀、いわゆるインド仏教終焉期に活躍した仏教学僧の著述活動読解を通して、その衰退への危機感の中でどのように教理・実践を展開させ、仏教の知識基盤を構築していったのかを解明することにある。特にアバヤーカラグプタ学統に注目した。

上記学統の中でも、ラトナラクシタ著『パドミニ』とヴィブーティチャンドラ著『ウドウヨータ』をとりあげ、比較対照した。各々異なる聖典への註釈書であるが、その中に当時のダイナミックな教理展開が見られる。また、当時の学僧たちに影響の大きな一聖典『サマーヨーガタントラ』の研究も並行しておこない、教理・実践の基盤を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当該科研プロジェクトの研究成果によって、12世紀頃のインド仏教終焉期、仏教学僧たちが衰退の一途を辿る状況に、如何にして抗ったのかということ、文献学的アプローチにより、その一端を示すことができた。この成果は、インド学や仏教学のみならず、文化史学など様々な研究分野にわたって、学術的意義を持つといえる。

さらに、当該成果は、宗教がどのように時代の趨勢に対応していくのか、その是非についても、垣間見ることができ、現代の宗教と社会との関わりを考える上でも、参考となるはずである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to elucidate how Buddhist scholar-monks, who were activate during declining time of Buddhism in the twelfth century, developed Buddhist doctrine and practices amidst their sense of crisis and worked for constructing the knowledge base of the Buddhism at that time. Especially, the Abhayakaragupta tradition is to be focused.

Within the above mentioned tradition, the work of Ratnaraksita, titled "Padmini", and of Vibhuiticandra, titled "Udyota", were chosen and comparatively studied. Although they are commentaries on different scriptures, each of them contains dynamic developments of Buddhist doctrine and practices during that time. Additionally, the research of the "Samayogatantra", which was one of the most influential scriptures at that period, is also conducted in order to explore the foundations of their doctrine and practices.

研究分野：インド仏教

キーワード：学知基盤形成 インド仏教終焉期 ヴィブーティチャンドラ アバヤーカラグプタ学統 ラトナラクシタ ウドウヨータ パドミニー サマーヨーガ

1. 研究開始当初の背景

インド仏教は13世紀初頭のムスリム信仰によるヴィクラマシーラ僧院など仏教拠点の崩壊を皮切りに加速度的に衰退へ向かったと言われている。最近の研究では、インド仏教は後援者の減少や他宗教の台頭などといった事由により、すでに10世紀頃から緩やかに衰退していったと考えられている。こうした状況の中で、12世紀頃の仏教僧たちは起死回生を狙い、さまざまな対抗策を講じていた。最も顕著な策としては、9世紀頃から多種多様に展開変容していた仏教の教理や実践を一つに整理・統合することであった。その対応策に奮闘したのは、12世紀初頭、ヴィクラマシーラ僧院において活躍していた学僧アバヤーカラグプタである。彼の著作は、それまでの教理と実践を如何にして統合するのかを主題の一つとしている。例えば、『ヴァジュラーヴァリー』は、それまでに成立していた多種多様なマンガラおよび実践法(灌頂儀礼など)を列挙し、それらの相違を挙げている。こうした整理・統合化のプロセスの中で、これまでの知識基盤の再構築が要求されたことは想像に難くない。この再構築を試みたアバヤーカラグプタの基本的な著述スタイルは、タントラ聖典や先師たちの著作から数多く引用し、それらの文証を中心に文章を綴っている。それまでの学僧たちも同じく文証を挙げて論述しているが、アバヤーカラグプタは、著作の大部分を文証としての引用に割いており、こうした著述スタイルは新しく、整理・統合化というプロセスを念頭に置いていると考えられる。そして、このスタイルはアバヤーカラグプタ学統下に引き継がれている。

本研究で主題とするヴィブーティチャンドラの『ウドゥヨータ』はインド後期密教聖典『ナーマサンギーティ』の註釈書、ラヴィシュリージュニャーナ著『アムリタカニカー』の複註である。この『ウドゥヨータ』にも上記スタイルが踏襲されている。そして、比較対照とする『パドミニー』は、ヴィブーティチャンドラと同時代に活躍し、ヴィクラマシーラ僧院内で彼の同僚(あるいは師匠の一人)であったラトナラクシタの著した『サンヴァローダヤタントラ』に対する広範な註釈書である。なお、この『パドミニー』は、本研究課題の研究協力者・種村隆元(大正大学)を研究代表者とした研究課題「註釈文献から見た後期インド密教における教理と実践の関係に関する研究」(2013~2015年度、基盤研究(C) 課題番号: 25370059)で、すでに扱われ、申請者は研究分担者として参画し、同著作の研究分析をおこなっている。ヴィブーティチャンドラとラトナラクシタ両者共にインド仏教の終焉(ムスリムの僧院破壊)を目の当たりにしており、彼らの持つ知識基盤をネパールやチベットといった当時の仏教国に受け継がせるために尽力したのである。アバヤーカラグプタ学統下に位置し、テーマは異なるといえども、共通する著述スタイルをもった、これら二つの著作を比較検証するという新たな試みによって、当時の学僧が共有する知識基盤を模索することが、現在、インド仏教終焉期を研究する上で必要となっている。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、文献学的アプローチによって、インド仏教最後期の学知形成とその展開を明らかにすることにある。インド仏教最後期という特異な時代背景の中で、仏教教理と実践の整理・統合化が、アバヤーカラグプタ学統下において推し進められていく。この整理・統合化プロセスの最後を飾る二人の学僧ヴィブーティチャンドラとラトナラクシタの著作を比較し、特に文証として引用される文献、さらには、それらを組み入れて展開される論理をも視野に入れ、彼らの、延いてはアバヤーカラグプタ学統全体の知識基盤を掘り出すことは、新たな試みである。

3. 研究の方法

本研究の目的であるインド仏教最後期の学知形成様態を解明するために、以下四つの作業をおこなう。

(1) ヴィブーティチャンドラ著『ウドゥヨータ』の校訂作業及び精読を通して、著者の学的背景を浮き彫りにする。

(2) 『ウドゥヨータ』とラトナラクシタ著『パドミニー』の両著作に見られる文証としての引用とその周辺の文脈(引用理由)を比較し、両学僧の知識基盤を確認する。

(3) 上記(2)の成果を受けて、こうした知識基盤がどのように共有されていたのか、また、インド仏教最後期という時代背景を考慮し、学僧たちの学知形成様態について考察する。

(4) 上記三つの作業に加えて、学僧たちに影響を及ぼしたと考えられる文献をいくつかとりあげ、それらの内容分析をして、学知形成にどのように寄与したのかを考察する。

4. 研究成果

本研究の成果として、まず初年度(2019年度)はヴィブーティチャンドラ著『ウドゥヨータ』とラトナラクシタ著『パドミニー』の両著作にアーリヤデーヴァの著作として引用されている文

献（文献名は不明）のサンスクリット語写本（NGMPP B31/6）に関する論文を刊行した。この文献は、断片写本に含まれており、最初の十九偈分のみ回収できる。おそらく10世紀頃以降、学僧たちに多大な影響を及ぼした文献であることは、ヴィブーティチャンドラとラトナラクシタだけでなく、多くの学僧たちが引用していることから伺える。このアーリヤデーヴァの著作は、学知形成する知識基盤の一つであるといえる。

二年目（2020年度）は、『パドミニー』第12章と第19章の研究に従事し、それぞれ成果を刊行した。第12章は、インド後期密教の中で使用されていた数珠と関連する念誦法が説かれている。第19章は、「死の兆候および死を欺く修法」について説かれており、研究協力者の房貞蘭博士とともに共同研究し、その成果を刊行した。

三年目（2021年度）は、同じく『パドミニー』第8章の研究に研究協力者の房貞蘭博士とともに従事した。この研究成果は、近日、刊行予定である。第8章の内容は、修行者が儀式（ガナチャクラ）をおこなう際に、同じ系統の信仰をもつことを確認するためのサインやその意味が説かれている。

当初は、三年間の研究期間であったが、コロナ禍のため、一年間の延長を申請した。

延長一年目は、このほど、新たに発見された写本に収録された12世紀頃に作成された文献、シャバレーシュヴァラ著『プラクリティシッディ』の研究に従事した。このシャバレーシュヴァラという人物は、当該科研のメインテーマに関わる学僧の一人ヴィブーティチャンドラとの関係がある人物であり、インド仏教終焉期に活躍したと考えられる。『プラクリティシッディ』の校訂テキストおよびその訳註の作成をおこなった。この研究成果は現在刊行準備中である。

上記四年間にわたって、インド後期密教へ多大な影響を及ぼした『サマーヨーガタントラ』の梵文和訳研究にも従事した。これは、駒沢大学の加納和雄先生、オランダ・ライデン大学（現在ハンガリー・ELTE大学所属）のピーター・サント先生、東京大学博士課程の伊集院菜との共同研究である。第1章から第5章（1-20偈）までを研究成果として刊行している。

これらの研究成果とともに、成果の刊行には到っていないが、当該科研の研究課題の一つであるヴィブーティチャンドラ著『ウドゥヨータ』の校訂テキストおよびその和訳（同時に英訳も作成）を作成している。研究計画当初はハンブルグ大学のハルナガ・アイザックソン先生をはじめとする専門家と校訂テキストおよびその翻訳の確認をしながら、ブラッシュアップして、成果の刊行を目指す予定であった。コロナ禍により、それがままならなくなったことから、現時点ではこの研究成果のドラフトは、少しずつ、報告者自身で修正している。コロナ禍も収束しつつあるので、今後、専門家との研究会などを通して、この成果の刊行にこぎ着けたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 倉西憲一	4. 巻 55
2. 論文標題 サンヴァラ系諸文献を収録する一帙の梵語写本について スコイエン・コレクションMS2170収録文献	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 密教学研究	6. 最初と最後の頁 61 - 74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント	4. 巻 7
2. 論文標題 梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第5章	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 川崎大師教学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 89 - 136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 倉西憲一	4. 巻 64
2. 論文標題 インド後期密教における数珠 『サンヴァローダヤタントラ』第12章および註釈書『パドミニー』の校訂テキストおよび訳註	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 豊山学報	6. 最初と最後の頁 1 - 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント	4. 巻 6
2. 論文標題 梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第4章	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 川崎大師教学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 33 - 63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Bang Junglan、倉西憲一	4. 巻 43
2. 論文標題 A Study on Yogic-suicide (utkranti) of the Samvarodayatantra -based on Preliminary Edition and Translation of Padmini ch.19-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大正大学総合仏教研究所年報	6. 最初と最後の頁 259 - 282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 種村隆元・加納和雄・倉西憲一	4. 巻 6
2. 論文標題 なぜ仏の姿の観想がさとりをもたらすのか(2)-Ratnaraksita 著Padmini 第13 章傍論後半和訳註-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 川崎大師教学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊集院菜、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント	4. 巻 42
2. 論文標題 梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第2・3章	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大正大学総合仏教研究所年報	6. 最初と最後の頁 47 - 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kenichi Kuranishi	4. 巻 28
2. 論文標題 An Unidentified Work attributed to Aryadeva contained in NGMPP B31/6 (19r1-20v): Preliminary Edition and Notes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佛教文化学会紀要	6. 最初と最後の頁 67 - 78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊集院菜、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント	4. 巻 41
2. 論文標題 梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第1章	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大正大学総合仏教研究所年報	6. 最初と最後の頁 61 - 100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 倉西憲一
2. 発表標題 サンヴァラ系諸文献を収録する一帙の梵語写本について
3. 学会等名 日本密教学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 倉西憲一
2. 発表標題 アバヤーカーラグプタ学統についてー密教教理と実践の統合化をめぐるー
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>academia.edu https://tais.academia.edu/KenichiKuranishi</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Monasteries and Doxography in Indian Buddhism	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 The Manuscripta Buddhica and The Vihara Workshop	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
オランダ	ライデン大学		